

鳥取県米子市

よどえちょうひらおかかみむこうやま いせき
淀江町平岡上向山遺跡

2010. 3

財団法人 米子市教育文化事業団



S B - 0 1 P 7 出土

序

平成21年の春に当事業団の埋蔵文化財調査室は、日新小学校跡に移転いたしました。平成4年に歴史館から始まった埋蔵文化財調査室は3度の引越を経て漸くこの地に腰を落ち着けることになりました。平成22年度には米子市の埋蔵文化財収蔵センターとして開館する予定となっており、当事業団は米子市との連携をますます強くし、米子市が合併に伴って掲げているプロジェクト「伯耆の国よなご文化創造計画」における、文化財の保護と活用の基本計画の一助が担えればと思っています。

今回、鳥取県から委託を受けて実施した「淀江町平岡上向山遺跡」の発掘調査報告書を刊行することになりました。調査では、古墳時代の住居跡が発見されました。この報告書が、今後さまざまな分野で広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、今回の調査に当たって多くの方々にお世話になりました。指導、ご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

平成22年3月

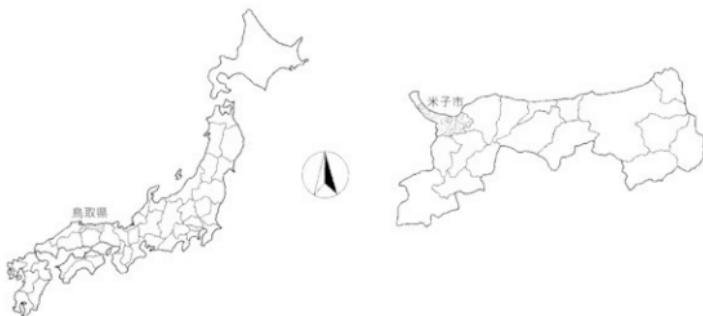
財團法人 米子市教育文化事業団
理事長 杉原 弘一郎

例　　言

- 1 本書は鳥取県の依頼を受けて、財団法人米子市教育文化事業団が平成20年度に実施した、県道赤松淀江線地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書の図中の方位は磁北で、レベルは海拔標高を示す。
- 3 本書に記載した第2図の地形図は昭和63年10月修正米子境港都市計画地図（米子市）を複写して掲載している。
- 4 本書に記載した第3図の地形図は平成17年1月1日、国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」を加筆して使用した。
- 5 発掘調査によって出土した遺物は、米子市教育委員会が保管している。
- 6 本書の執筆及び編集は（財）米子市教育文化事業団が行った。

凡　　例

- 1 遺物実測のうち、須恵器は断面を黒塗り、その他の遺物は断面を白抜きで示した。
- 2 遺跡の略称は、HOKMYとした。
- 3 遺物実測図の土器の縮尺は1/4、玉類は1/1で掲載している。
- 4 本文、挿図及び写真図版中の番号は一致する。
- 5 柱穴の法量は（長辺×短辺－深さ）で表記している。



第1図 米子市位置図

目 次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の体制	1
第2章 位置と環境	2
第1節 位置	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 淀江町平岡上向山遺跡の調査	6
第1節 調査の経過と方法	6
第2節 調査区内の堆積	6
第3節 遺構について	6
第4節 遺物について	11
第4章 まとめ	12



第2図 平岡上向山遺跡位置図
(S = 1 : 20,000)

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県が進める県道赤松淀江線地方道路交付金事業に伴い、文化財の保護を目的とした調査である。

これを受けて平成18年度に米子市教育委員会が試掘を行った結果、遺物の包含層が確認され、鳥取県との協議の結果、調査を平成20年度に行うこととなった。現地調査は、平成20年11月5日から平成20年11月29日まで行った。

調査の結果、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、土坑2穴の遺構を確認し、縄文土器・土師器・須恵器・玉が出土した。

第2節 調査の体制

・調査主体	財団法人米子市教育文化事業団	・調査指導	米子市教育委員会
理 事 長	杉原弘一郎	・作業員	
・調査担当	埋蔵文化財調査室	足立誠一	生田博子 梅林明子
室 長	長谷川明洋	大塚敏子	加藤晴巳 木村勝美
主任調査員	平木 裕子	妹川智子	谷野綾子 平田 忠
臨時職員	秦 美香	福嶋昌子	松山節子 三浦郁子
非常勤職員	田中 昌子	安江満つ美	山根志保 (敬称略)

第2章 位置と環境

第1節 位置

今回調査を行った淀江町平岡上向山遺跡は、米子市の東部の淀江町平岡地区に広がる古墳時代の集落跡である。

米子市は鳥取県の最西端に位置し、古くから「山陰の商都」と称されるように商業で栄えた鳥取県西部の中核都市である。平成17年春に東部に隣接する淀江町との合併により総面積132.21m²、人口約15万人となった。

地形的には、日野川の沖積作用によって形成された山陰では比較的広い平野である米子平野が広がり、周辺部を東側に大山（標高1,709m）とその造山活動によって形成された火山灰大地、南側から西側には中国山地から続くなだらかな丘陵によって囲まれる。北側には日野川の流出土砂の堆積によって形成された弓ヶ浜半島が島根半島へと延び、これらの半島に囲まれた汽水湖中海に面する。

淀江町平岡上向山遺跡は、米子市街地の東約7km、大山の裾野の旧米子市と旧淀江町の境に位置する。北側には壺瓶山を、北東方向には淀江平野の広がりを望み、さらにその奥に日本海を望む小高い丘陵に広がる百塚遺跡群の一角を成す。百塚遺跡群は主に弥生時代から古墳時代の集落跡及び古墳群で知られる遺跡で、今回の調査地は旧淀江町教育委員会によって設定された（第2図）百塚第3遺跡の南東側に位置する。

第2節 歴史的環境

当該地区で人類の痕跡が見られるようになるのは旧石器時代まで遡ることが出来る。小波で黒曜石製のナイフ形石器、中西尾で黒曜石製の有舌尖頭器、奈喜良遺跡・陰田宮の谷遺跡のほか、隣接する南部町諸木遺跡²・福成石佛前遺跡においてもサヌカイト製の有舌尖頭器が出土している。

繩文時代の遺跡としては、早期の遺跡として多くの土坑や配石墓と考えられる集石が発見されている上福万遺跡があげられる。前期になると日久美遺跡で多数の石錐や獸骨、ドングリ貯蔵穴、青木遺跡³では落し穴群が検出され、新山山田遺跡、古市遺跡群において繩文時代の遺構・遺物は出土しているが、集落としての全体像は不明である。この時期の遺跡の分布の中心は日野川の東岸に見られる。旧淀江地区では、多量の石錐・黒曜石剥片とともに木製漁獵具が出土した早期から前期の渡り上り遺跡⁴、隣接する鮎ヶ口遺跡⁵では爪形文土器、条痕文土器、曾畠式土器が出土している前期の遺跡である。河原田遺跡⁶では、後期から晩期にかけての土器が多量出土しているほか、井手膀遺跡⁷では漆塗櫛・耳環をはじめとする漆製品が出土している。その他壺瓶山第1遺跡⁸・井手鉢遺跡においても繩文時代の土器及び遺構が検出されている。百塚遺跡群⁹では落し穴が検出されている。

弥生時代になり海退が進むとともに低湿地が広がり、水田が開かれるようになる。そしてその周辺の微高地では集落が営まれるようになる。前期の遺跡としては、日久美遺跡・池ノ内遺跡・長砂第1・2遺跡・錦町第1遺跡などのほか、淀江平野の北部の今津岸の上遺跡¹⁰では前期末のV字状環濠が確認されたほか、初期稻作集落が形成されたことが窺える。

中期になると丘陵にも集落が営まるようになるが、大規模で長期間継続するものと、小規模で短期間で消滅するものとに分かれ。淀江地区においても平地から微高地にかけて晚田遺跡¹¹・北尾宮廻遺跡¹²・角田遺跡¹³・福岡遺跡¹⁴など集落が分散して営まれるようになる。中でも角田遺跡で出土した線刻絵画は、当時の生活様式及び精神世界を知るうえにおいて貴重な資料といえる。福岡遺跡で確認された粘土採掘坑は、土器製作に用いられたものと考えられる。日野側西岸の堤防的遺跡には、目

久美遺跡・青木遺跡・越敷山遺跡群・橋本遺跡群が挙げられる。

後期になるとムラを統括する首長が出現するようなるが、青木遺跡、福市遺跡、越敷山遺跡など中期から引き続き大規模な集落を形成する一方、尾高浅山遺跡1号墓⁴や日下1号墓⁵で知られる四隅突起型埴丘墓が発達する。また淀江地区においては、百塚第1遺跡、楚利遺跡⁶、井手挟遺跡、坂ノ上遺跡⁷のほか、国内最大の高地性集落として知られる妻木晩田遺跡⁸が出現する。ここでは集落・環濠および埴丘墓が確認されるなど、国家形成期の地方の様相を示す遺跡として注目される。

古墳時代になると勢力をもった集団の存在を裏付けるかのように古墳が築かれるようになる。前期の古墳としては、三角縁神獣鏡が出土した普段寺1号墳・2号墳、石州府29号墳⁹、日原6号墳が知られる。普段寺1号墳は前方後円墳、普段寺2号墳・日原6号墳は方墳、石州府29号墳は円墳である。淀江地区においては晩田山古墳群¹⁰において墳墓が確認される。

中期の古墳としては三崎殿山古墳などがみられる。また米子平野周辺の丘陵部には多くの古墳群が存在する。日野川西側では、福成早里古墳群、宗像古墳群、東宗像古墳群、陰田・新山遺跡群、新山・古市遺跡群、日野川東側では、尾高古墳群¹¹、日下古墳群¹²、石州府古墳群¹³などの古墳群がみられる。淀江地区においては上ノ山古墳が築造され、ここでは竪穴式石室から、内行花文鏡・滑石製小勾玉・甲冑の出土している。中期後半になると向山3号墳¹⁴や坂ノ上1号墳¹⁵が築造されるが、盾持人などの形象埴輪が多量に出土した井手鉢3号墳や径40mを測る日吉塚古墳などが含まれる中西尾古墳群¹⁶において、淀江平野を支配した首長墓の系譜が窺える。

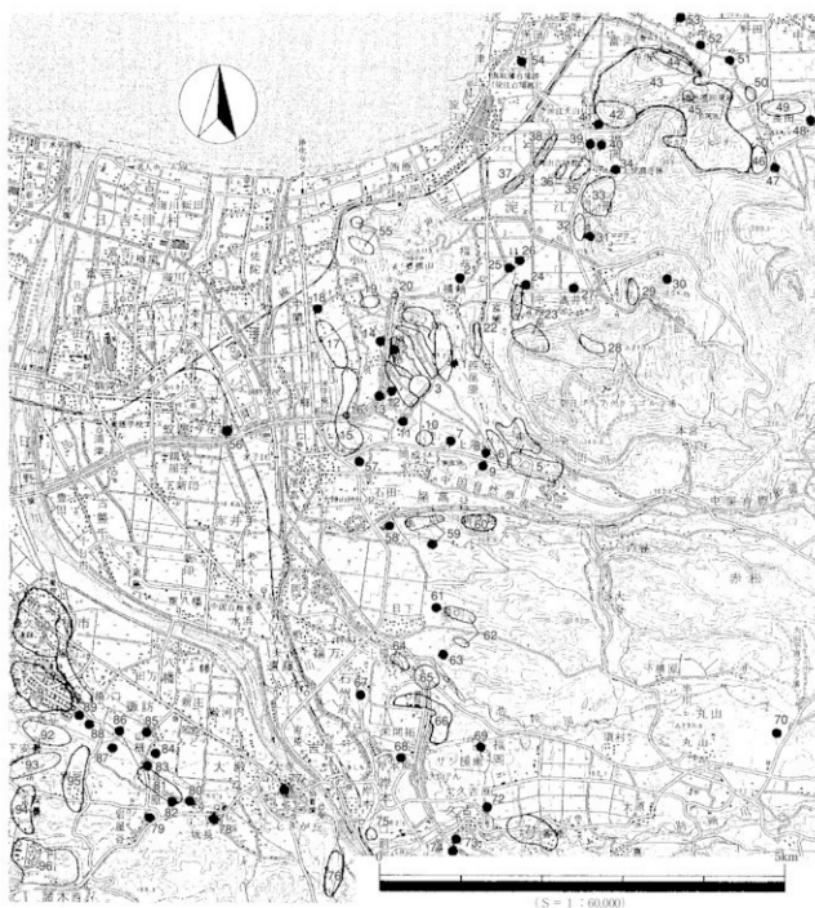
後期になると米子平野において横穴式石室を主体部とする古墳と、横穴墓の両方が展開するいくつもの古墳群が形成されるようになる。中でも石州府古墳群、東宗像古墳群、宗像古墳群、陰田古墳群などがよく知られる。淀江地区周辺においても古墳の数は増え広く分布するようになるが、首長の系譜は向山古墳群に移ったようで、石馬谷古墳・長者ヶ平古墳、岩屋古墳などが築造される。一方城山遺跡¹⁷、稲吉遺跡¹⁸、四十九谷遺跡¹⁹、高井谷遺跡²⁰、中西尾遺跡²¹、西尾原遺跡²²、百塚遺跡²³、壺瓶山遺跡²⁴、小波山古墳²⁵、中間遺跡²⁶など丘陵地で多く確認されていた。しかし近年の博労町遺跡の調査で海浜部においても集落跡が営まれていたことが確認された。

一方集落遺跡は、弥生時代から引き続いて営まれる福市遺跡²⁷、青木遺跡、百塚第1遺跡、井手挟遺跡などのほか、奥谷掘越谷遺跡、奈喜良遺跡、吉谷上ノ原山遺跡、吉谷トコ遺跡、新山砥石山遺跡、新山山田遺跡、古市カワラケ田遺跡、百塚第4、第5、第6、第7遺跡、泉上経前遺跡、小波泉原遺跡、福頼遺跡²⁸など丘陵地で多く確認されていた。しかし近年の博労町遺跡の調査で海浜部においても集落跡が営まれていたことが確認された。

奈良時代以降の遺跡としては、墨書き土器や木簡など官衙に関する遺物が出土している陰田・新山遺跡が知られているが、吉谷銭神遺跡、吉谷中馬場山遺跡でも墨書き土器や赤色塗彩土器などが出土している。その他福市・青木遺跡、淀江地区的百塚遺跡群で集落跡が確認されている。

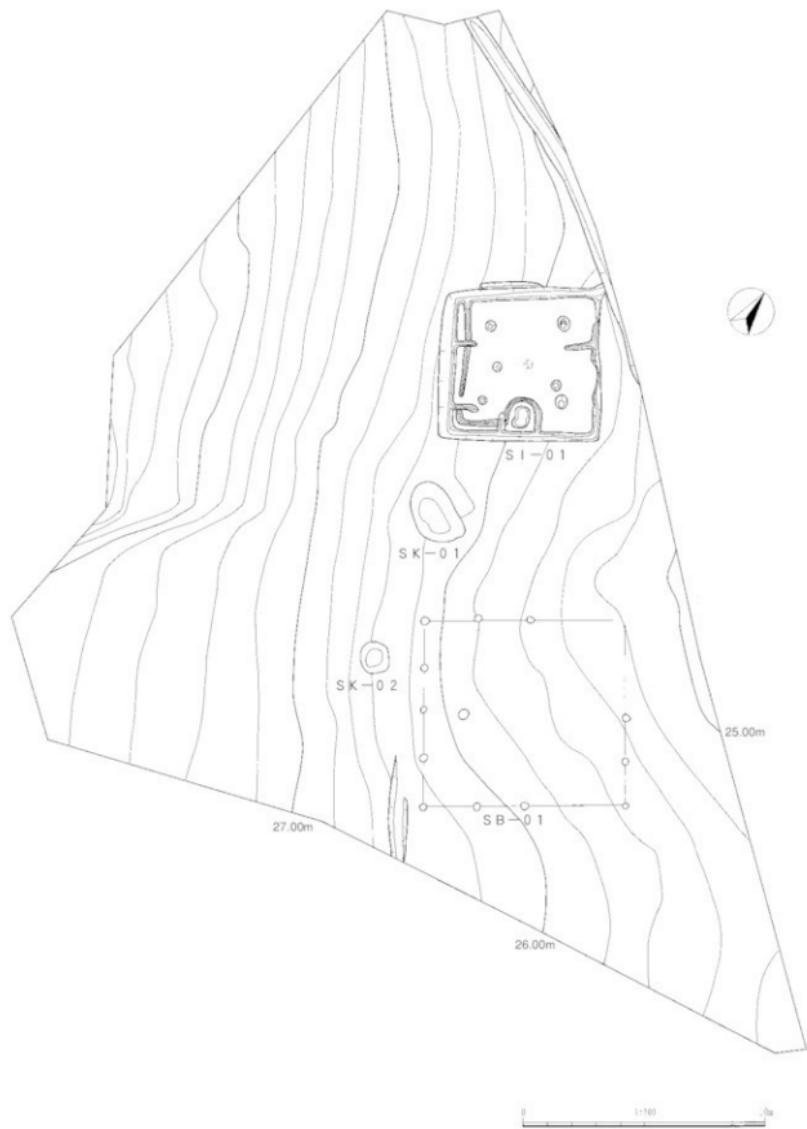
白鳳期には全国的に多くの寺院が建立されるようになるが、国内最古級の仏教壁画が出土したことで注目された上淀庵寺跡²⁹が有名である。

中世遺跡としては、城館跡として、中世の拠点であったと思われる尾高城³⁰をはじめ、山名氏支配下の国人によって構築されたと思われる新山要害、石井要害、橋本七尾城などがある。そのほか、中世の遺跡としては、青木古墓、諏訪1号墳³¹、別所長峰古墓、長砂経塚、中山経塚などがある。その他の遺跡として、錦町第一遺跡、博労町遺跡では畠の歓を確認している。



第3図 周辺遺跡分布図

1 宝来町白山上の山遺跡	15 鹿島古墳群	29 稲荷古墳群	57 尾高城跡	71 鶴原遺跡群	84 須訪中山遺跡
2 小波川原遺跡	16 尾高獨立山遺跡	30 四十九ヶ村六墓群	44 鶴木山古墳群	58 尾高浅山遺跡	85 須訪赤山／後塚跡
3 百瀬遺跡群	17 中間古墳群	31 小林山瓦窯跡	45 善田山古墳群	59 石田古墳群	86 須訪1号墳
4 萩多御第1遺跡	18 番ノ上遺跡	32 城山古墳群	46 清平山古墳群	60 新良遺跡	87 別所中野原下式穴
5 萩多御第2遺跡	19 小道山古墳群	33 小林山古墳群	47 大新田遺跡	61 日下堂平遺跡	88 植口第3遺跡
6 萩多御第3遺跡	20 大下田遺跡	34 上淀庵寺跡	48 德美方塚	62 日下古墳群	89 植口第4遺跡
7 萩多御第4遺跡	21 鶴林遺跡	35 仙山古墳群	49 長田今井遺跡	63 日下寺山遺跡	90 稲中遺跡
8 萩多御第5遺跡	22 木尾所古墳群	36 稲荷古墳群	50 宮尾山古墳群	64 上福万遺跡	91 吉木遺跡
9 重多御第5遺跡	23 中西尾古墳群	37 井手持遺跡	51 保田遺跡	65 上福万跡	92 仁山遺跡
10 重多御第6遺跡	24 沼田遺跡	38 福田遺跡	52 善相寺跡	66 石州府古墳群	93 下安曇遺跡群
11 常内屋敷遺跡	25 留り上り遺跡	39 北尾宮迫遺跡	53 大道市遺跡	67 河向城跡	94 上安曇古墳群
12 朝前田遺跡	26 新ヶ口遺跡	40 今津河原ノ上遺跡	54 今津河原ノ上遺跡	68 磐梯西土取場遺跡	95 別所遺跡群
13 朝中峰遺跡	27 田邊遺跡	41 稲荷遺跡	55 今在家下井ノ上遺跡	69 稲荷古墳群	96 鶴木遺跡
14 朝上野ノ上遺跡	28 通井谷古墳群	42 稲荷山古墳群	56 今在家下井ノ上遺跡	70 丸山日当遺跡	97 須訪東二ノ上遺跡



第4図 調査地全体図

第3章 目久美遺跡の調査

第1節 調査の経過と方法

現地調査は、平成20（2008）年11月5日から開始し、平成20（2008）年11月29日まで行った。調査面積は、約600m²で、深いところで現地表面から約1.5m掘り下げた。調査地は大山の裾野の丘陵地に当たり、調査地の南東側で約10cm掘り下げたところで地山を検出し、北西方向に向かって緩やかに傾斜し、北西部側の厚いところでは約1.5m掘り下げたところで地山を検出した。調査地は標高約28mで、調査開始時は荒地であったが以前は耕作地として利用されていた。

地表面から10~20cmまでの現在の耕作土を重機で除去した後、人力により掘り下げていった。

遺物の取上げ、遺構の実測については、トータルステーションを使用した。調査の結果、遺構としては竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、土坑2穴を検出した。遺物は縄文土器、土師器、須恵器、玉が出土した。

第2節 調査区内の堆積

調査地は大山の裾野の丘陵にあたるが、調査前の地形は標高27.0~29.0mのほぼ緩やかな傾斜地であった。調査後は最頂部の標高28.8m、最低部標高25.0mと、高低差約4m、傾斜角度9°と、調査地の南東側から北西側に向けて傾斜し、堆積も傾斜にあわせて下方に向かうにつれて厚くなる。

第3節 遺構について

竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡1棟、土坑2穴を検出した。

竪穴住居跡（第5図）

SI-01 調査区の西側隅において検出した。一部が調査区外にかかるため調査区を西に拡張して全体の調査を行うことになった。

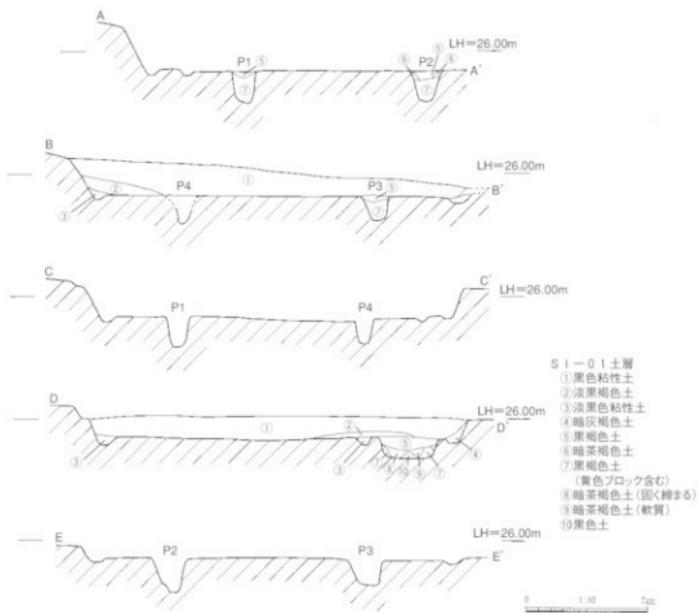
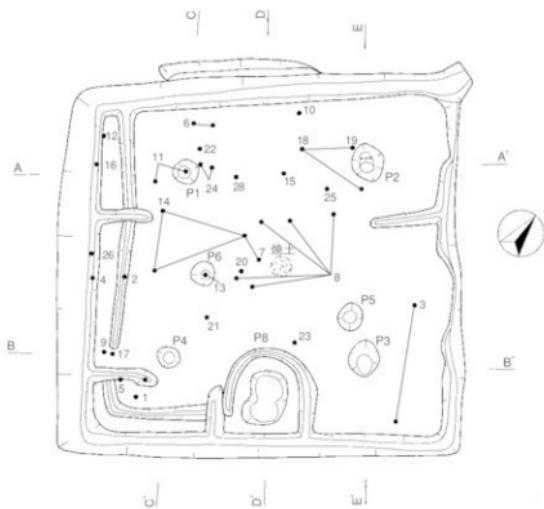
一辺6.6m×6.5mの方形で、主軸はN45°E方向を向き、残存壁高は最大70cmを計る。床面には壁に沿って幅約20.0cm、深さ10.0cmの溝が掘られ、この溝から直行するよう床面中央に向かって1m前後の溝が、北東・南東側で一条、南西側で2条側掘られている。また本住居は拡張が行われたようで南東及び南西側で壁面から約50cm内側に拡張前のものと思われる溝を検出した。

本住居の主柱穴は4本で、P1(45cm×42cm-51cm)、P2(65cm×54cm-50cm)、P3(60cm×53cm-40cm)、P4(40cm×35cm-45cm)で、P1 P2間3.0m、P2 P3間3.2m、P3 P4間3.2m、P4 P1間3.05mである。P3の北西に拡張前の柱穴と思われるP5(48cm×42cm-60cm)を検出したが、これに対応する柱穴は確認できなかった。床面中央には径約30cm程度の焼土面を中心で焼けた痕跡が点々と残る。本住居には主柱穴の他に南東側壁面中央床面に、90cm×70cm-35cmの柱穴が2穴並んだ「ダルマ型」を呈する特殊な穴を検出した。この穴の周囲には幅25cm・深さ15cmの溝を巡らす。性格は不明である。

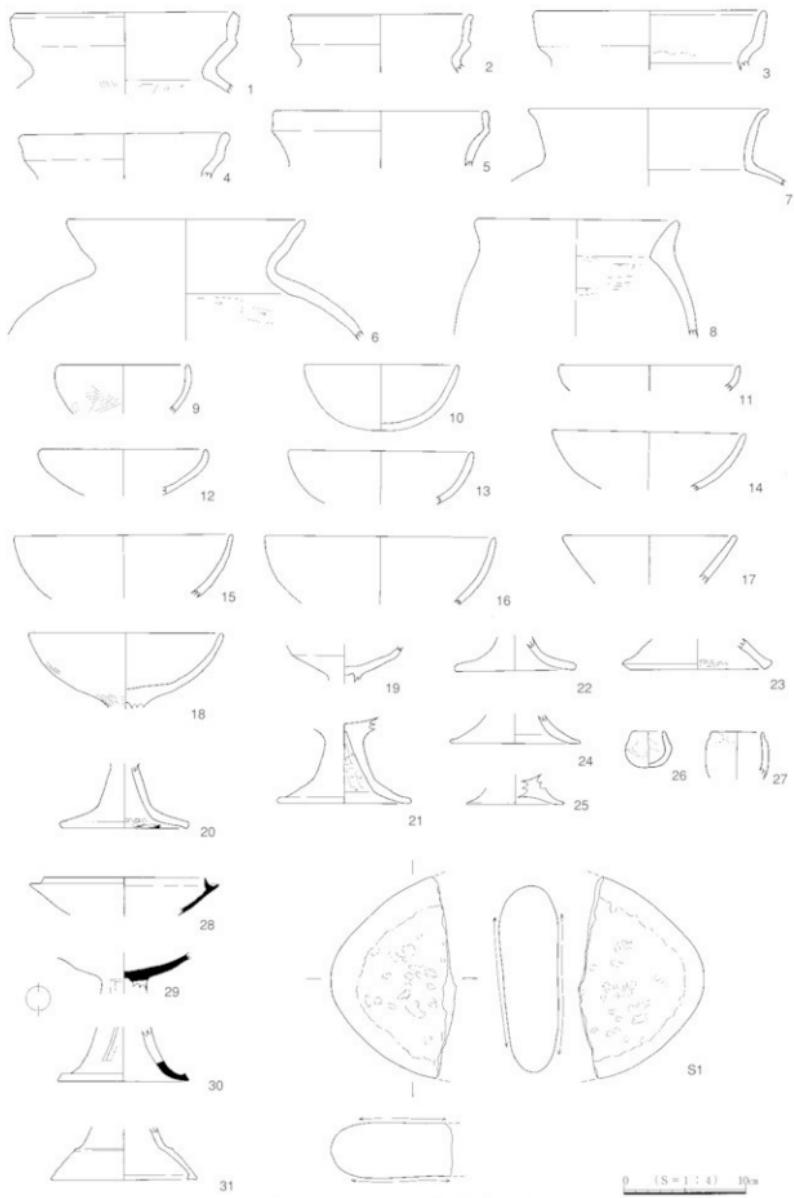
出土遺物（第6図） 本住居から若干の遺物が出土しているが、そのほとんどが掘り下げ中のもので、小破片や摩滅した状態の悪いものであった。床面からは数点小破片が出土したのみであった。

土師器 №1~№8は甕、№9~№17は壺で、うち№11はP1、№13はP6から出土している。№18~№24は高杯、№25は低脚杯、№26・№27は手捏ね土器である。

須恵器 №28は环身、№29・№30・№31は高杯である。

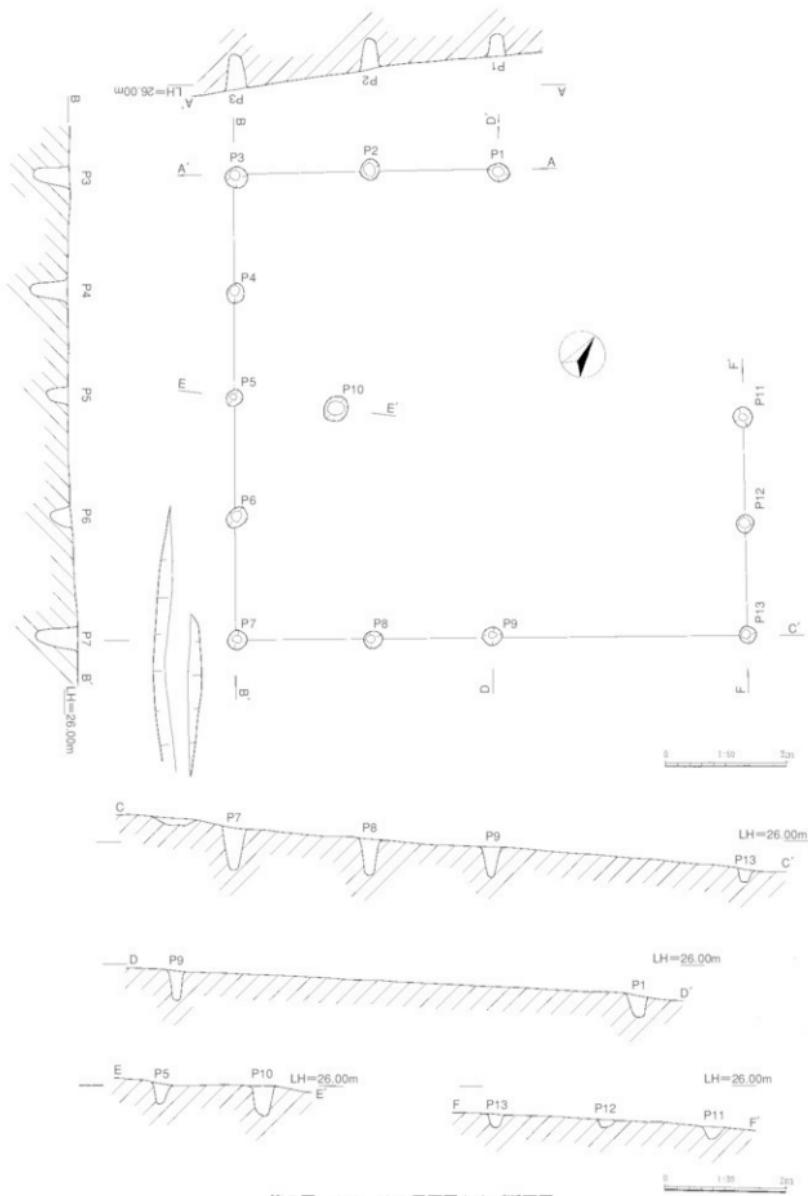


第5図 S1-01平面図および断面図



第6図 SI-01出土遺物実測図

0 (S=1:4) 10cm



第7図 SB-01平面図および断面図

石器 S 1は安山岩製の石皿である。

このうちNo.5、No.7、No.12、No.19、No.27は床面に近い位置で出土したものである。

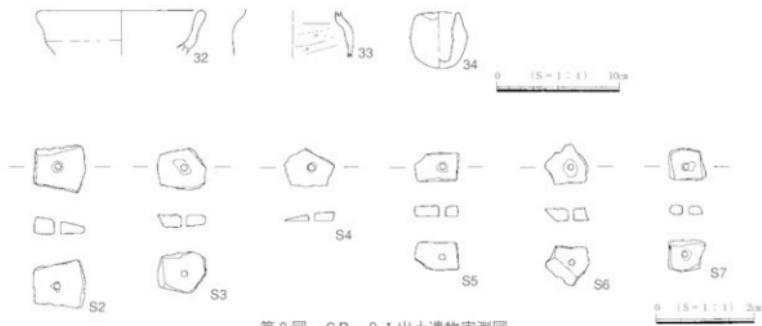
これらの遺物から本住居は古墳時代前期後葉のものと考えられる。

掘立柱建物跡（第7図）

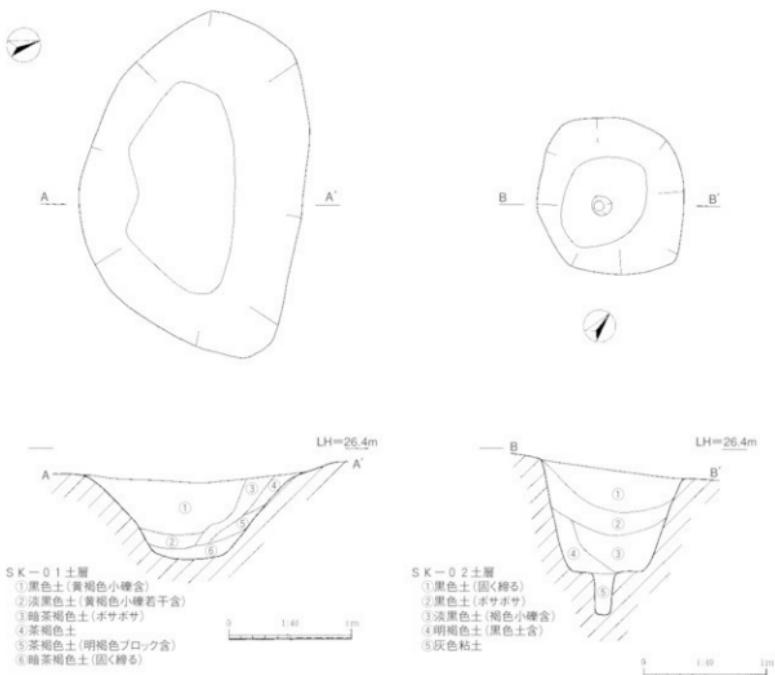
SB-01 SI-01の南東7mの位置で検出された。桁行4間×梁行4間の建物跡と思われ、主軸はN35°W方向を向く。柱穴は12本を確認し、埋土はいずれも黄色ブロックを含む黒褐色土一色である。P 1 (40cm×30cm~40cm)、P 2 (35cm×30cm~50cm)、P 3 (40cm×36cm~58cm)、P 4 (35cm×30cm~60cm)、P 5 (30cm×27cm~36cm)、P 6 (40cm×27cm~34cm)、P 7 (32cm×32cm~70cm)、P 8 (30cm×30cm~60cm)、P 9 (34cm×30cm~50cm)、P 10 (45cm×40cm~22cm)、P 11 (35cm×32cm~20cm)、P 12 (30cm×25cm~15cm)、P 13 (27cm×27cm~22cm)で、P 1 P 2間2.05m、P 2 P 3間2.2m、P 3 P 4間1.9m、P 4 P 5間1.75m、P 5 P 6間1.95m、P 6 P 7間2.0m、P 7 P 8間2.27m、P 8 P 9間2.0m、P 9 P 13間4.15m、P 13 P 12間1.85m、P 12 P 11間1.75mである。P 5の北東にP 10 (40cm×35cm~50cm)を検出したがいずれの方向軸からもずれることから、P 10は本住居に伴うものではないと考える。

本建物の南西には、幅80cm・深さ12cmの溝が残るが、北西側は自然消滅し、南東側は調査区外にかかったためその全体像は不明である。

出土遺物（第8図） P 1から土師器の甕No.32、P 4から小型壺No.33、P 7から手捏ね土器No.34が出土した。このうちNo.34の手捏ね土器の中から、滑石製の玉の未成品S 2~S 7が入っていた。地鎮に使用した可能性が考えられる。



第8図 SB-01出土遺物実測図



第9図 SK-01・02平面図および断面図

土坑（第9図）

SK-01 調査区のほぼ中央で検出した、径約2.6m×1.85m、深さ0.62mの土坑である。断面は擂鉢状を呈す。遺物の出土はなかった。

SK-02 SK-01の南側で検出した、径約1.38m×1.18m、深さ0.87mの落し穴である。底中央には径約0.16m×0.14m、深さ0.32mの杭穴痕跡が残る。遺物の出土はなかった。

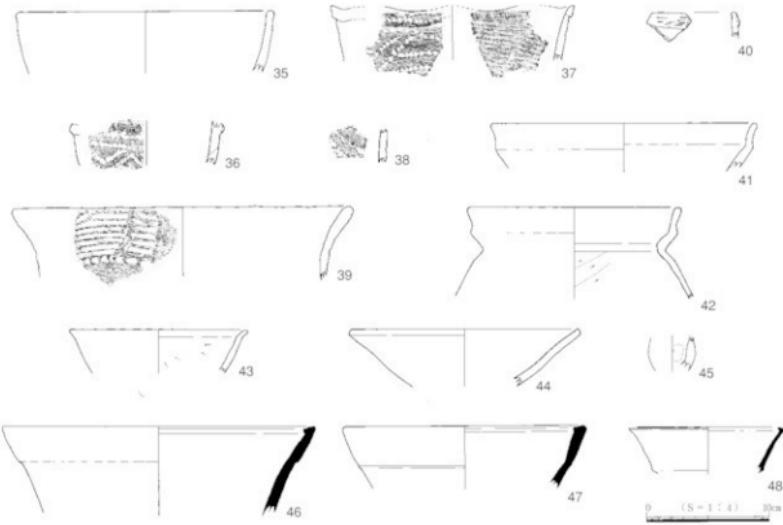
第4節 遺物について（第10図）

遺構外遺物は調査区の北側で集中して出土した。しかし埋土が浅いうえ、耕作地だったためか、ほとんどが小片あるいは著しく磨耗したもので出土量に対して図示できたものは少なかった。

縄文土器 №35～№38・№40は、鉢型土器の口縁部と思われる。№36は貼付凸帯、№37・№40貼付帯を付し、№36～№38には刺突も施される。№39は深鉢と思われ、口縁部に沈線と刺突を付し、沈線の上に貼付帯を付す。

土師器 №41・№42は甌の口縁部で、№43・№44は高坏の坏部である。№45は手捏ね土器である。

須恵器 №46・47は甌の口縁部、№48壺の口縁部である。



第10図 その他の出土遺物実測図

第4章 まとめ

今回の調査で確認された竪穴住居と掘立柱建物はほぼ方角が同一で、出土遺物から見ても同時期のセット関係にある遺構と考えられる。時期的には5世紀後半から6世紀前半と百塚遺跡群で最も多く見られる5世紀から6世紀の範囲にあたる。竪穴住居跡は、百塚遺跡群でもみられる古墳時代の典型的な方形住居で特殊ピットを有する。掘立柱建物は、ピットの中から未製品ではあるが、玉の入った手捏ね土器が出土していることから、地鎮の儀式が行われたものと考えられる。隣接する百塚第7遺跡13号建物跡ではピット内から小型壺が出土しており、また百塚第5遺跡では建物にはならないがピットの中から、手捏ね土器が出土しているなど、地鎮のためと思われる土器がピットの内から出土する例はすぐくない。しかし残念ながら今回のように土器の中に玉が混入された事例を見出すことはできなかった。隣接する百塚第2遺跡・第3遺跡には多くの古墳が確認されているほか、百塚第1遺跡では玉造り遺構と考えられる17号住居跡も確認されていることから何らかの関係も考えられる。

最後に、今回の調査区となる百塚遺跡群の東側一帯は調査が行われていない地区で、今回はじめて調査をおこなった。隣接する百塚第2遺跡・第3遺跡は古墳群が広がり、その隣接地の百塚第4遺跡以西には、集落を確認している。今回の調査では調査範囲が狭かったため竪穴住居と掘立柱建物各1棟の確認に留まったが、百塚遺跡群の東側にも集落がある可能性が示唆された。近年小規模ではあるが百塚遺跡群の西側においても調査が行われており、今後の調査によって百塚遺跡群の新たな展開が見られることを期待するものである。

遺物觀察表 (S I - 0 1)

遺物 番号	種類	種別	地区	層位	法量 (cm)			焼成	色調	胎土	調整	備考	
					口径	残存高	底径						
1 6	甕	土器器	SI-01		18.0	6.7		良好	褐色	密		外) ナデ・ハケ目 内) ナデ・ケズリ 口縁部面取り	
2 6	甕	土器器	SI-01		14.5	4.8		良好	褐色	密		内外面共にナデ 口縁部面取り	
3 6	甕	土器器	SI-01		18.6	4.9		良好	暗褐色	密		外) 調整不明 内) ナデ・ケズリ	
4 6	甕	土器器	SI-01		16.8	3.7		良好	淡褐色	密		内外面共にナデ	
5 6	甕	土器器	SI-01		17.2	4.6		良好	暗褐色	密		内外面共にナデ	
6 6	甕	土器器	SI-01	上層	19.2	9.9		良好	褐色	密		外) ナデ 内) ナデ・ケズリ	
7 6	甕	土器器	SI-01		19.6	6.3		良	暗茶褐色	密		風化のため調整不明	
8 6	甕	土器器	SI-01		16.2	9.6		良好	淡褐色	密		内) ナデ・ケズリ	
9 6	坪	土器器	SI-01		10.6	4.0		良好	淡橙褐色	密		外) ナデ・ハケ目 内) ナデ	
10 6	坪	土器器	SI-01	上層	12.5	5.4	1.8	良好	褐褐色	密		内外面共にナデ	
11 6	坪	土器器	SI-01		14.8	2.1		良	褐褐色	密		内外面共にナデ	
12 6	坪	土器器	SI-01		13.6	3.8		良好	(外) 暗褐色 (内) 赤褐色	密		P1内 内外面共にナデ	
13 6	坪	土器器	SI-01		15.0	4.3		良好	(外) 淡褐色 (内) 暗褐色	密		風化のため調整不明	
14 6	坪	土器器	SI-01		15.8	4.7		良	暗褐色	密		内外面共にナデ	
15 6	坪	土器器	SI-01		17.8	5.1		良好	暗褐色	密		内外面共にナデ	
16 6	坪	土器器	SI-01		18.8	5.5		良	(外) 暗褐色~ (内) 暗褐色	密		内外面共にナデ	
17 6	坪	土器器	SI-01		15.8	6.3		良好	暗褐色	密		風化のため調整不明	
18 6	高坪	土器器	SI-01	床面	13.9	4.0		良好	淡褐色	密		内外面共にナデ 脚部	
19 6	高坪	土器器	SI-01	下層	3.1			良好	暗褐色	密		風化のため調整不明 皿部	
20 6	高坪	土器器	SI-01	床面、上層	5.3	10.1		良好	暗褐色	密		外) ケズリ後ナデ・ハケ目 内) ナデ	
21 6	高坪	土器器	SI-01		7.0	10.6		良好	淡褐色	密		脚部、赤彩	
22 6	高坪	土器器	SI-01		2.9	9.8		良好	褐色	密		内外面共にナデ 脚部	
23 6	高坪	土器器	SI-01		2.5	11.0		良好	褐色	密		外) ナデ (内) ナデ・ハケ目 脚部	
24 6	高坪	土器器	SI-01		2.4	10.4		良好	褐色	密		内外面共にナデ 脚部	
25 6	低脚坪	土器器	SI-01	下層	2.5	7.8		良好	淡褐色	密		内外面共にナデ 脚部、一部赤色	
26 6	甕型	手づくね	SI-01	床面	2.4	3.0		良好	褐色	密		内外面共にナデ 最大径3.8cm	
27 6	甕型	手づくね	SI-01	床面	4.2	3.9		良好	暗褐色	密		内外面共にナデ	
28 6	甕型	手づくね	SI-01	床面	13.2	3.1		良	暗褐色	暗形		内外面共にナデ	
29 6	高坪	須惠器	SI-01			3.4			堅緻	灰色	密形		内外面共にナデ
30 6	高坪	須惠器	SI-01	上面		4.4	10.6		堅緻	灰色	密形		内外面共にナデ 脚部
31 6	高坪	須惠器	SI-01			4.4	12.0		堅緻	乳灰色	密		内外面共にナデ 脚部

遺物觀察表 (S B - 0 1)

遺物 番号	種類	種別	地区	層位	法量 (cm)			焼成	色調	胎土	調整	備考
					口径	残存高	底径					
32 8	甕	土器器	SB-01		13.0	3.7		良好	暗褐色	密		内外面共にナデ P1内
33 8	小甕	土器器	SB-01			3.1		良好	暗褐色	密		(外) ナデ (内) ナデ・ケズリ P4内、最大径10.8cm
34 8	甕型	手づくね	SB-01		3.4	4.7		良好	淡橙褐色	密		調整不明 P7内

遺物觀察表 (その他)

遺物 番号	種類	種別	地区	層位	法量 (cm)			焼成	色調	胎土	調整	備考
					口径	残存高	底径					
35 10	鉢	繩文	南西		20.6	5.1		良好	(外) 褐色 (内) 暗褐色	密		内外面共に調整不明
36 10	鉢	繩文	南東			3.5		良好	淡橙褐色	密		(外) 刺突文・粘付実害 (内) ナデ
37 10	鉢	繩文	南東		20.0	4.5		良好	暗褐色	密		(外) 刺突文 (内) 目砂条痕
38 10	鉢	繩文	南東			2.8		良好	暗褐色	密		(外) 刺突文 (内) 貝殻条痕
39 10	深鉢	繩文			28.0	5.6		やや良	褐褐色	粗: 砂粒含		(外) 繩文 (内) ナデ
40 10	鉢	繩文	南東			2.4		良好	暗褐色	密		内外面共にナデ
41 10	甕	土器器	南西		21.4	4.0		良好	褐色	密		内外面共にナデ
42 10	甕	土器器	南西		17.0	7.5		良好	暗褐色	密		(外) ナデ (内) ナデ・ケズリ 外面保付着
43 10	高坪	土器器	南西		14.4	3.6		良好	褐色	密		丹塗
44 10	高坪	土器器	南西		18.5	4.7		良好	暗褐色	密		内外面共にナデ 脚部
45 10	甕型	手づくね	南西			2.9		良好	褐色	密		内面指付圧痕
46 10	甕	須惠器	南東		24.4	7.3		堅緻	(外) 褐褐色 (内) 暗褐色	緻密		内外面共にナデ
47 10	甕	須惠器	南西		13.0	3.8		良	淡灰褐色	密		内外面共にナデ
48 10	甕	須惠器	南東		19.6	5.1		堅緻	灰色	密		内外面共にナデ



S I - 0 1 完掘状況（北東側から）



調査前風景



S I - 0 1 遺物出土状況



S I - 0 1 完掘状況（南西側から）



S I - 0 1 特殊ピット

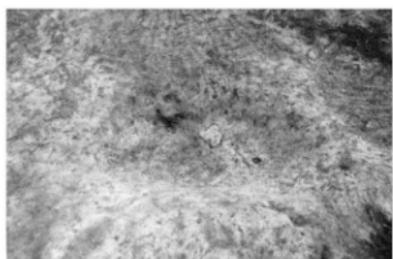
写真図版 2



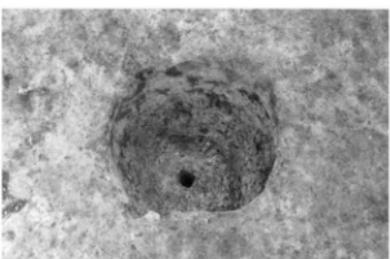
S B - 0 1



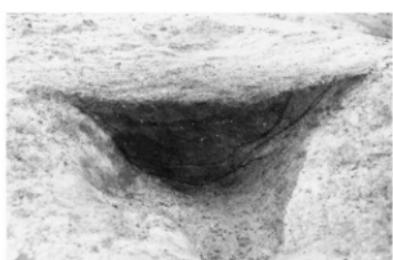
作業風景



S K - 0 1 完掘状況



S K - 0 2 完掘状況



S K - 0 1 断面



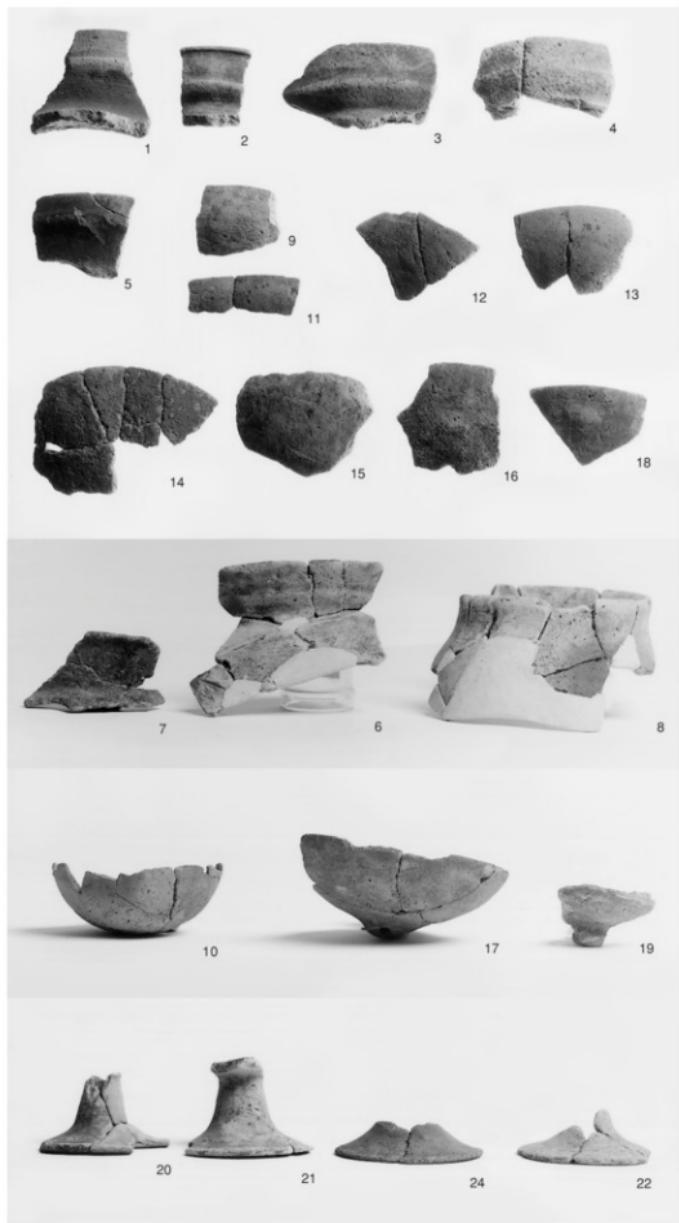
S K - 0 2 断面



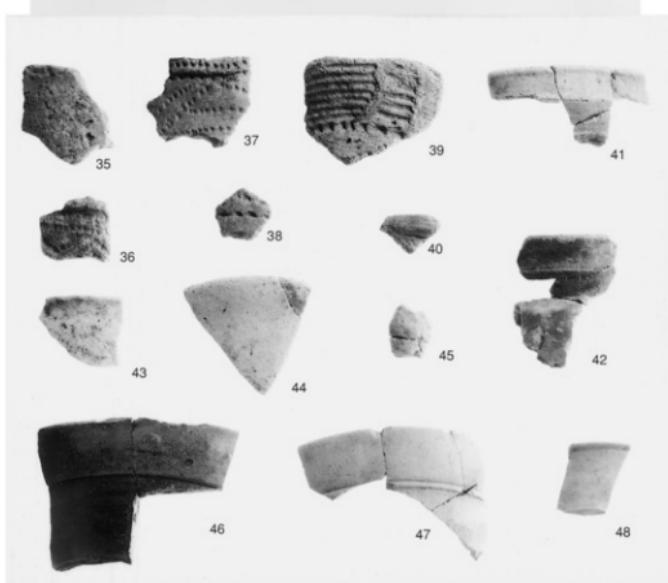
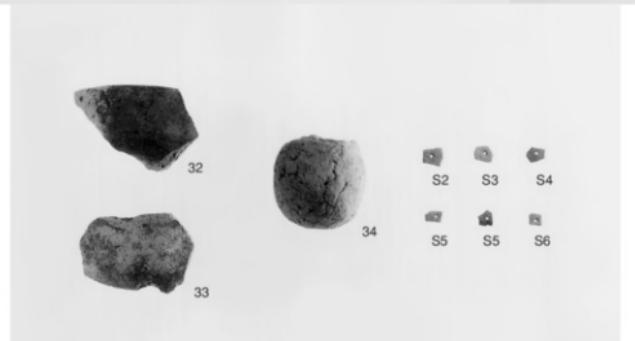
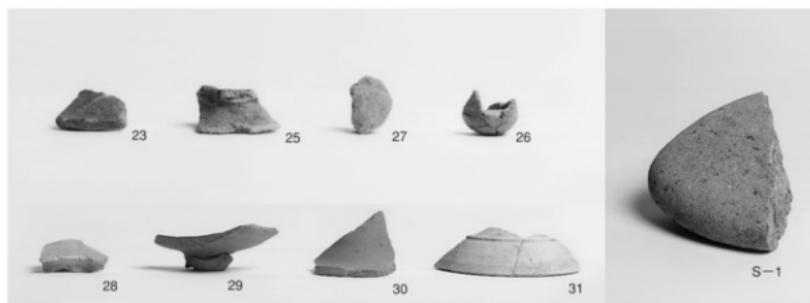
調査後全景



調査遠景



写真図版 4



参考文献

- 「天下畠谷遺跡」鳥取県教育文化財団1994年
 「百塚第7遺跡（8区）」鳥取県教育文化財団1995年
 「百塚第5遺跡」鳥取県教育文化財団1995年
 「小波狹間谷遺跡」鳥取県教育文化財団1995年
 「泉上経前遺跡」鳥取県教育文化財団1995年
 「百塚第1遺跡」淀江町教育委員会1989年
 「百塚古墳群」淀江町教育委員会1992年
 「百塚遺跡群Ⅲ」淀江町教育委員会1993年
 「百塚遺跡群Ⅳ」淀江町教育委員会1995年
 「百塚遺跡群Ⅴ」淀江町教育委員会1996年
 「百塚遺跡群Ⅵ」淀江町教育委員会1996年
 「百塚遺跡群Ⅶ」淀江町教育委員会1997年
 「百塚遺跡群Ⅷ」淀江町教育委員会1999年
 「百塚遺跡群Ⅸ」淀江町教育委員会1999年

報告書抄録

ふりがな	よどえちょうひらおかかみむこうやまいせき						
書名	淀江町平岡上向山遺跡						
副書名	県道赤松淀江線地方道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	61						
編著者名	平木裕子						
編集機関	財団法人 米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室						
所在地	〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地 TEL・FAX 0859-260455 eメールアドレス yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp						
発行年月日	西暦 2010年 3月31日 平成 22年 3月31日						
所収遺跡名	所在地	コ一ド 市町村・遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
淀江町 平岡上向山 遺跡	鳥取県米子市 淀江町平岡	31202	35度 25分 55秒	133度 25分 20秒	平成20年 11月5日 平成20年 11月25日	600m ²	道路改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
淀江町 平岡上向山 遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡・掘立柱建物跡 土坑		縄文土器、土師器、 須恵器、玉		